

「次世代へ語り継ぎたい あの日あの時」

～賀茂高等女学校生徒の戦争・原爆体験～

編集

広島県立賀茂高等学校同窓会事務局

まえがき

先の敗戦から79年もの年月が経過しています。戦後生まれの世代が人口の8割を超え、戦争や被爆体験は「記憶」から「歴史」へと変わりつつあるなか、その実状や惨禍をだれがどのように次世代へ伝えていくかが問われています。

本小冊子は、広島県立賀茂高等学校の前身である、賀茂高等女学校で学んだ方々から直接お話を伺い、現地を巡り、そして残された手記などを抜粋してまとめたものです。その多くは、徴用軍人という立場ではなく、また直接的に被爆した者でもない、ごく一般的な人々の体験と率直な思いです。戦時下において、若者たちが抱いた悲壮感や喪失感に思いを馳せるとともに、その後の「生きる力」に学び、共感したい。そして、これから生きる中・高校生の皆さんに、戦争や被爆の実相にふれ、それを継承してもらいたいとの願いから作成されたものです。

ここ数年「新型コロナウイルス感染症」の影響を経て私たちの生活は変化を余儀なくされました。また、継続的に社会・経済活動の自粛が要請され、学校生活においても行事や部活動の大会が中止ないしは縮小を余儀なくされたことは記憶に新しいところです。それでも皆さんの「学び」の機会そのものが失われることはありませんでした。今から80年近く前、戦況の悪化にともなう「学徒出陣」や「学徒勤労働員」によって若者たちの「学び」が奪われてしまったという悲しい事実を受け止め、この小冊子が「平和」と「人権尊重」の普遍性そして不断の努力による保持について問い直すきっかけとなれば幸いです。

2024年4月

広島県立賀茂高等学校同窓会事務局

目 次

第1部 学徒勤労働員と被爆者救護救援活動

(1) 学徒勤労働員

- ① 第十一海軍航空廠での勤労働員
- ② 広島陸軍被服支廠学校工場での勤労働員

(2) 原爆の犠牲となった生徒

(3) 被爆者救護救援活動

- ① 広島逡信局及び逡信病院
- ② 本川国民学校
- ③ 広島市立第一国民学校
- ④ 大河国民学校

第2部 戦争・原爆体験とその後の人生

(1) 作家 大庭みな子 と原爆

(2) 原爆後を生きる

(3) 被爆を免れた生徒たちとその苦悩

(4) 戦争・被爆体験を語る

- ① 西川 美恵子
- ② 清老 綾子

第3部 継承そして未来へ

第1部 学徒勤労働員と被爆者救護救援活動

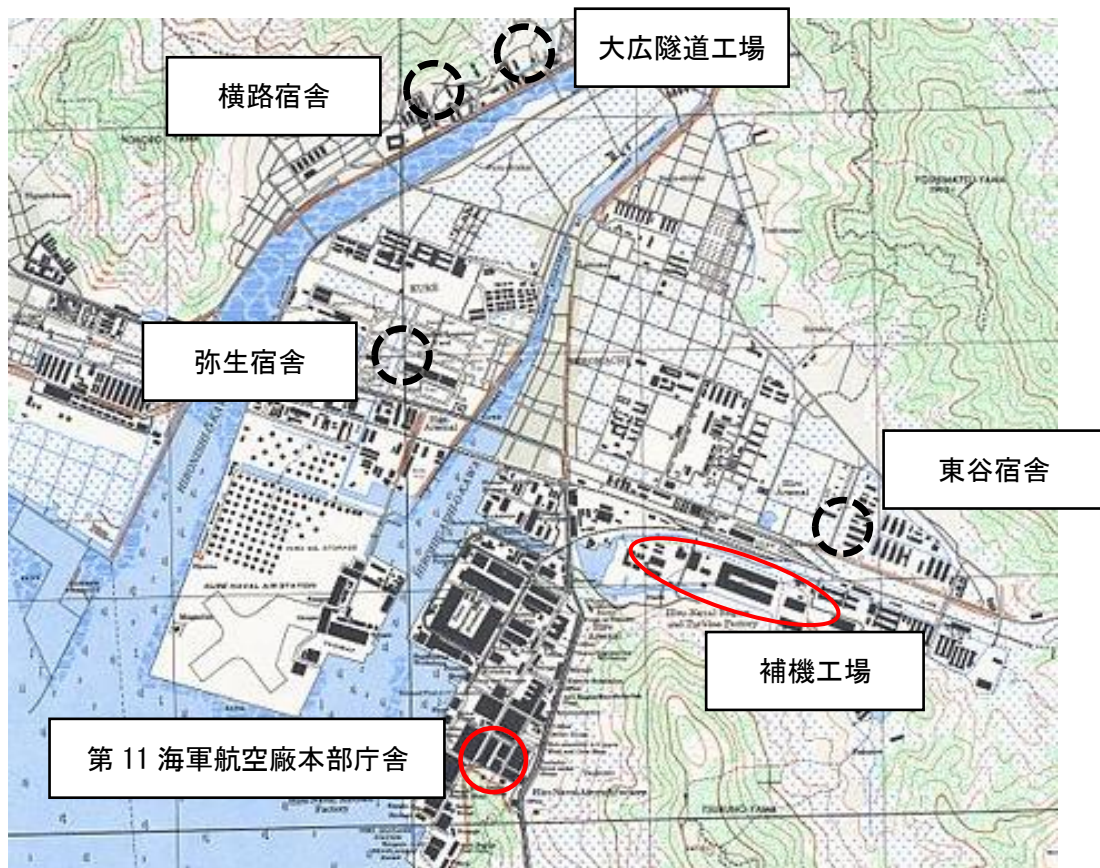
(1) 学徒勤労働員

盧溝橋事件後の日中戦争を契機として国民精神総動員体制が始まります。1938（昭和13）年には「国家総動員法」、1939（昭和14）年には「国民徴用令」が発令され、国民の勤労働員体制は強化されていきます。さらに、1941（昭和16）年の太平洋戦争開戦後の軍需部門を中心とする労働力不足に対応するため、1944（昭和19）年には「女子勤勞挺身令」、そして学徒動員の通年化によって男性のみならず12歳から40歳までの女性も軍需工場などに動員されました。さらに、翌年4月からは1年間の授業停止が決まり、担任教師も動員先へと配属されました。



① 第十一海軍航空廠での勤労働員

現在の呉市広にあった第十一海軍航空廠（広海軍工廠航空部から独立）へは4年生が派遣されました。最初の動員は1944（昭和19）年6月、現在の横路中学校付近の女子宿舎へ寄宿し、約2km離れた発動機部第二工場（補機工場）で航空機部品の研磨作業等に従事。同年9月には三交代制の勤務となり、宿舎は現在の広古新開に位置した弥生宿舎へ移動となりました。空襲が度重なる中、爆撃を逃れるために山の斜面に掘られた大広隧道内の工場でも作業が行われました。



宿舎から工場へは、隊列を組み学徒動員の歌や軍歌を合唱しながら通ったそうです。翌年、昭和20年3月28日の卒業式は、弥生宿舎内で挙行され、卒業後も「女子挺身隊」として引き続き勤労働員作業は続きました。

花もつぼみの若桜 五尺の生命（いのち）ひっさげて
国の大事に殉（じゅん）ずるは 我ら学徒の面目ぞあ紅の血は燃ゆる

次の新聞記事は、1976（昭和51）年5月に卒業生（昭和20年卒）が、約31年振りに横路宿舎付近の初崎神社の社殿において再会し、思い出を語り旧交を温め合ったことを伝える記事です。



【中国新聞 1976年5月24日掲載】



【現在の呉市横路にある初崎神社】

コロナ禍が継続する2022（令和4）年1月、大竹市にお住まいの和田（上沖）和子さんからご連絡をいただき、感染対策に配慮しながら当時のお話を伺いました。河内町入野のご出身である和田さんは、1928（昭和3）年生まれの94歳。賀茂高等女学校へは自宅から峠越えの山道を約40分歩いて白市駅まで行き、汽車で通学されたそうです。女学校入学時は半分が授業、半分が奉仕活動（出征農家の支援や水田の溝切り作業など）だったそうです。田植えの時期は、足にヒルが纏わりついて苦労されたそうですが、稲刈りの時期は昼食に美味しい料理を振る舞ってもらい、みんなで食べるのが楽しかった思い出が残っているそうです。

4年生になった1944（昭和19）年5月から広の横路を宿舎として第十一海軍航空廠での学徒勤労働員が始まりました。宿舎には県内外の他校の女学生も動員されていました。入宿後、約3か月は宿舎に隣接するグラウンドでの陸上訓練（鉢巻き・ブルマー・素足での隊列訓練や教練）が中心で、食事は魚が一片としなびた玉葱入りの味噌汁のみといった粗食だったそうです。炎天下での厳しい訓練を



経て、9月頃から工場内で発動機部品の研磨作業に昼夜三交代制で従事しました。わずかな休憩時間を除き、約8時間の立ちっぱなしの辛い作業を終え、宿舎に帰ってからのお風呂が一番の楽しみだったそうです。翌年の1945（昭和20）年3月、宿舎内で簡易な卒業式を挙げてもらった後も女子挺身隊として勤労働員は続きました。空襲や爆撃から逃れるために、宿舎から防空壕やトンネル内、橋の下などに逃げ込むことも度々あり、恐怖と疲労そして家族恋しき日々は終戦まで続いたそうです。戦時下の体験そして戦後の人生を振り返り、「今は家族にも恵まれ、感謝しています」と話していただきました。

4年生の卒業後、第十一海軍航空廠での勤労働員は3年生（新4年生）に引き継がれました。3月と5月の激しい空爆で工場が大きな被害を受けたため、作業は裏山の隧道（トンネル）内で行われ、動員先で原爆投下や終戦記念日を迎えることとなりました。当時の様子について、田坂万千枝さん（昭和21年卒）は、次のような手記（「被爆」50周年を迎えて）を寄せています。

仕事場は広駅裏の補機工場でした。15歳の少女で三直交代の仕事も致しました。寒くて暗い道を軍歌を歌いながら、東谷の寮から工場まで列をなして通いました。また、夜中働いて、朝、疲れ果てて寮に帰り、雑炊をすすって眠るみじめさもありました。戦争もだんだん追い詰められて、空襲・空襲で夜中に防空壕の中に逃げ込み、母恋しさに涙したことも幾度か…。

その頃になると工場は敵機の的となるので、工場裏の名田山に大きな広い迷子になりそうな横穴が掘られ、重たい大きな機械がほとんど運び込まれて、夜も昼も煌煌と電気の灯ったそのトンネルの中での仕事となりました。誰がいつの間にそれだけの大きなトンネルを掘ったのか、今のように進んだ機械もない時代に、また若い人が殆ど召集でいなかったでしょうに、今でも不思議に思える一つです。

旧第十一海軍航空廠本部庁舎（現在の王子マテリア呉工場から元産業技術総合研究所）向かいのコンクリート斜面には、アメリカ軍のグラマン戦闘機による機銃掃射弾丸跡（右下画像）が今も生々しく残っています。



② 広島陸軍被服支廠学校工場での勤労働員

1944（昭和19）年11月から、賀茂高等女学校は広島陸軍被服支廠の学校工場となりました。3年生の生徒は西・東・中のクラスごとに、本館2階の教室へ持ち込まれた多数のミシンを使用して軍人用の下着（シャツやズボン下）、雨外套の穴かがりとボタン付けなどの縫製作業に従事。被服支廠女子工員の指導のもと、作業時間は朝8時から、夕方6時まで続き、疲れが出てくる午後3時から「特攻時間」と称し、無言での作業で集中力を高めたそうです。

当時の学校工場の様子について、3年生に在学していた大庭（椎名）みな子は次のような随筆（「亡霊の囁き」角川書店「野生時代」1975年4月号）を残しています。



【中国新聞 2019年4月5日掲載】

二年生の後半と三年生の前半を学業は放棄させられ、学徒動員でミシン作業をやらされた。学校が広島陸軍被服廠の分工場となり、一日十一時間の労働、休日は月に一回しかなかった。

食糧もなく、衣料もなく、考える道具は片っ端からもぎとられた。岩波文庫の赤帯を持っているということだけで自由主義者だと言ってなぐられ、ミシンの針を折ると、国家の貴重な資源をおろそかに扱ったと言ってなぐられた。兵隊さんのシャツを縫う代わりにあやまって自分の指を縫ってしまったときでさえそうである。病院で割れた指の間から折れた針をひきぬかれたとき、私は声をあげて泣きじゃくった。痛かったからではない。戦争とはこういうものだと思っただけに胸がはりさけたからである。



(2) 原爆の犠牲となった生徒

広島市内から30km以上離れた位置にある賀茂高等学校にとって、8月6日の原爆投下による犠牲者は当時3年生であった上田茂子さん1名です。茂子さんは、亡くなった叔母さんの葬儀に参列するため、弟とともに前日の5日から広島市内へ入り、翌日、葬儀の朝に原爆に遭遇しました。母親のあや子さんは、「原村史」（昭和42年発行）に次の手記を寄せています。

原村史（上巻）「あの日に二児を失って」（上田あや子）

「昭和二十年八月六日、原爆の悲劇」。二六時中忘れることのできないこの世の生き地獄。原爆二十年。犠牲になった二人の子の歳を数えてまた新たな涙に暮れる。私は四人の子宝を喜びとし、誇りにもしていた。長男は暁部隊に入隊し、次男は学生であったが、これも飛行隊にはいたいと、東京から希望をいつてきた。二人とも戦死すること覚悟せねばならぬ。寂しかった。

長女茂子は賀茂高女の三年生であった。学校は軍隊の被服廠に工場化した。四年生が挺身隊として呉や広の工場に出向ったあとは、三年生が代ってミシン仕事に当った。日曜も祭日もない。帰ると「お母ちゃん足が痛いよ」と訴える。暑さと疲れで痩せていた。それでも毎朝女子挺身隊の鉢巻姿で元気に自転車のペダルを踏んで出かけた。「今日はB29が学校の上を飛ぶので仕事にならなかった」と報告する。いろいろなニュースも聞かせてくれた。三男信彦は松本工業の二年生で、動員されて国鉄電気部で働いた。

八月五日、大手町八丁目の親戚の伯母の灰葬であった。その日は日曜で特に休みだったので、長女は三男と共に広島に来てくれた。前日の葬儀には私たち夫妻が列席したが主人だけ夕方原に帰った。子供等は主人の代わりに来たのだ。灰葬もすみ私と長女は夜汽車で帰村する積りで広島駅に出た。子供二人が切符を買う行列に加わった。切符の数に制限があるのでとうとう買うことができなかつた。それでは明朝にしようと私は馬木の生家に、子供等は大手町にと分れて泊まった。

翌朝子供等は切符を求めに駅に来た。今度は切符を買うことができた。駅で二人は私をまっていた。長女は忘れ物に気付き大手町へとりに行った。三男も出た。長女は駅に引き返す途中原爆にやられて行方不明。三男はあとでわかつたのだが、鷹野橋で爆風に倒れた。私は広島駅で落ち合うことにしていたが、バスに乗りおくれ途中でピカにあった。きつと広島駅に爆弾を落したのだと無我夢中で大洲橋まで馳せつけたが、そこで消防団に押し止められた。市内へ一歩も踏み入れられない。子供等はどうしているだろう。ぞろぞろ市内から引きあげるのは、顔や手足など露出した部分を大火傷の人ばかり。目もあてられない。二人の子供は汽車に乗ったろうか、こちらに歩いて来ないか、夕方まで待ったが帰って来るのは知らない人ばかり。ふと考えた。道がちがって海田駅から原に帰ったかも知れぬ。海田駅まで歩いた。海田では見つからない。急いで原に帰った。原では私等三人が帰るのを待っているのだと両親がいう。これはどうしたことか、泣いても泣ききれず、前にも進まれず、後にも去られず、六日の夜はまんじりともしなかつた。火傷には渋柿が良いということなので、夜中青柿を沢山もぎとり、それに二人の着替一切、果物・菓子・水筒と万一のことがあつたらよくなるまで看護してやろうと、一週間分の食料を用意して主人と夜の明けるのを待ちかねて八本松に急ぎ、四時過ぎの汽車に乗った。

海田市の寺院・学校・収容所を訪ね、茂子よ信彦よと、主人と代る代る呼び歩いた。船越・向洋・府中とつぎつぎに収容所を尋ね廻った。市内は火の中でとても歩けない。東練兵場に来た。倒れて虫の息の人、髪を切った兵隊さんたち多勢倒れている。

ふと婦人従軍歌を思い出した。一線で働いて軍人はみなこのとおりであろう。長男も二男もこのようになるのだろうと声を立てて泣いた。ここに倒れている皆さんの親御も同じ思いで待つて

いられることだろうと、念珠を出して拝んだ。あるお寺の収容所で「おじさん、おばさん」と呼んでくれる人がある。誰れかさっぱり判らない。「渡辺です、藤保です」という。びっくりして近寄って見ても渡辺さんのようにならない。顔も手足も腫れ上がり、まる裸の全く変りはてた姿である。ただ聞きなれた声だけでたしかめた。「御両親に生存されていることを知らせてあげるから頑張きなさいよ」と言い残して分れた。「水を飲ませて」と訴える声、声。はじめは少しずつ飲ませていたが、「水を飲ませると急に死ぬ」という話も聞いているし、我が子に飲ませるのが無くなってはと、水筒を見せないことにした。あの時ばかりは心が鬼になったと思った。

同じ収容所で、全裸で、腫れ上がって目も見えず、水腫れがずるずる潰れ、肌の皮が破れて襦袢が下がったような姿で、ただ「木をくれ、痛いよ、痛いよ」とうめく人。片息の人。狭いバラックへ何百人も収容されて手の施しようもない。日陰にかつぎ込まれたのは幸運な方で、焼けつくようなカンカン照りの下でうめいている人が多い。どうしようもない。我が子もどんなにか私を待っているだろう。早く逢いたいとあせるばかり。七日も暗くなって歩けない。欠賀町の親戚で一夜を明かした。夜が明けるとまた二人は麦わら帽に相変らずの姿で出かけた。

八日には市内の火もあらかた消えたので、第一番に広島駅付近を探し廻り、つづいて鷹野橋辺に行った。広い広島市も一面の焼野原。残るは鉄筋コンクリートの残骸と水槽だけ。主人の後に泣き泣き見当もなく歩き廻った。地面はまだ火気があるところへ、真夏の暑さに、汗と涙で手拭は幾度しぼったことか。何千何百の死体を見ながら、時には手をかけ動かして見たり、モンペの柄をしらべたりした。県庁前の水槽や鷹野橋までの水槽の中で、五、六人ずつ立ったままの女学生の焼死体。可愛想にさぞ「お母ちゃん、お母ちゃん」と呼びつづけたことであろう。合掌せずにはおられない。

八日は出汐町の親戚に宿泊。九日は宇品方面、似島、鯛尾島を予定し、先ず宇品収容所へ。そこでしらべると、上田信彦鯛尾島暁部隊と出っていたので二人は大喜び、さっそく鯛尾島に渡った。係りの軍曹が「昨夜苦しんでよく眠っていないので静かに休ませてやってくれ、ひどい火傷だから」といった。すぐ面会させてくれた。「信彦ちゃん……お父ちゃんもお母ちゃんも来たよ」信彦は涙を浮かべ「お母ちゃん、僕はね、鷹野橋で爆風にやられ、一間ほどはね上げられ俯伏せに落ちた。それから兵隊さんの車で宇品に運ばれた。お姉ちゃんは忘れ物をとりに西本（大手町の親戚）へ後戻りしたので、きっと原に帰っておる」と話してくれた。「お母ちゃん、お母ちゃん」と呼ぶ。頭元で、持ち歩いた果物や水筒の水をあげようかという、「ここにまだみかんがある。毎日みかんをもらうからいらない」と満足していた。「お母ちゃん、井戸の冷たい水を茶碗へ一杯飲ませて、それから家の前の倉庫のサイダーを飲ませて頂戴」と頼む。夫妻で相談した。たしかかなようだから大丈夫だろう。主人がサイダーをとりに原に帰り、長女が帰っておるか見てくる。私は残って看護するということにした。どこが痛いかと尋ねると、それには答えず、ただ、冷たい水とサイダーが飲みたいというばかり。そこへ兵隊さんが来て「静かに、静かに」という。足もとにさがり足をさすっているうちに鼻汁を出し、眠っているのに呼吸は大きくなり容態が急変した。主人はまだよう帰らずに外にいたので呼び込んだ。もう話もできない。意識は不明になった。私は手を握り、脈を見ていた。信彦ちゃん、信彦ちゃんと呼んでも返答もない。吐く息も次第に細りついにとまった。両親の顔を見て家に帰った気持になって永い眠りについたのであろう。

冷たい水も無く、サイダーも飲ませなかったことが一生忘れられない憾みである。今でもサイダーを見ると思い出す。胸が一杯になる。思い詰めると胸が板をはせたようになる。三日間持ち歩いた着替えも間に合わず、柿の渋も用をなさず、葡萄も菓子も口にせず哀れな全裸で永い眠りについた。思い出しては「ああ、可愛いや可愛いや、主人や私への善知識であった」と感謝せずにはいられない。死体は兵隊さんがさっそくタンカに乗せた。お経をあげるひまもない。髪の毛と手の皮と爪だけ持ち帰って葬儀をした。

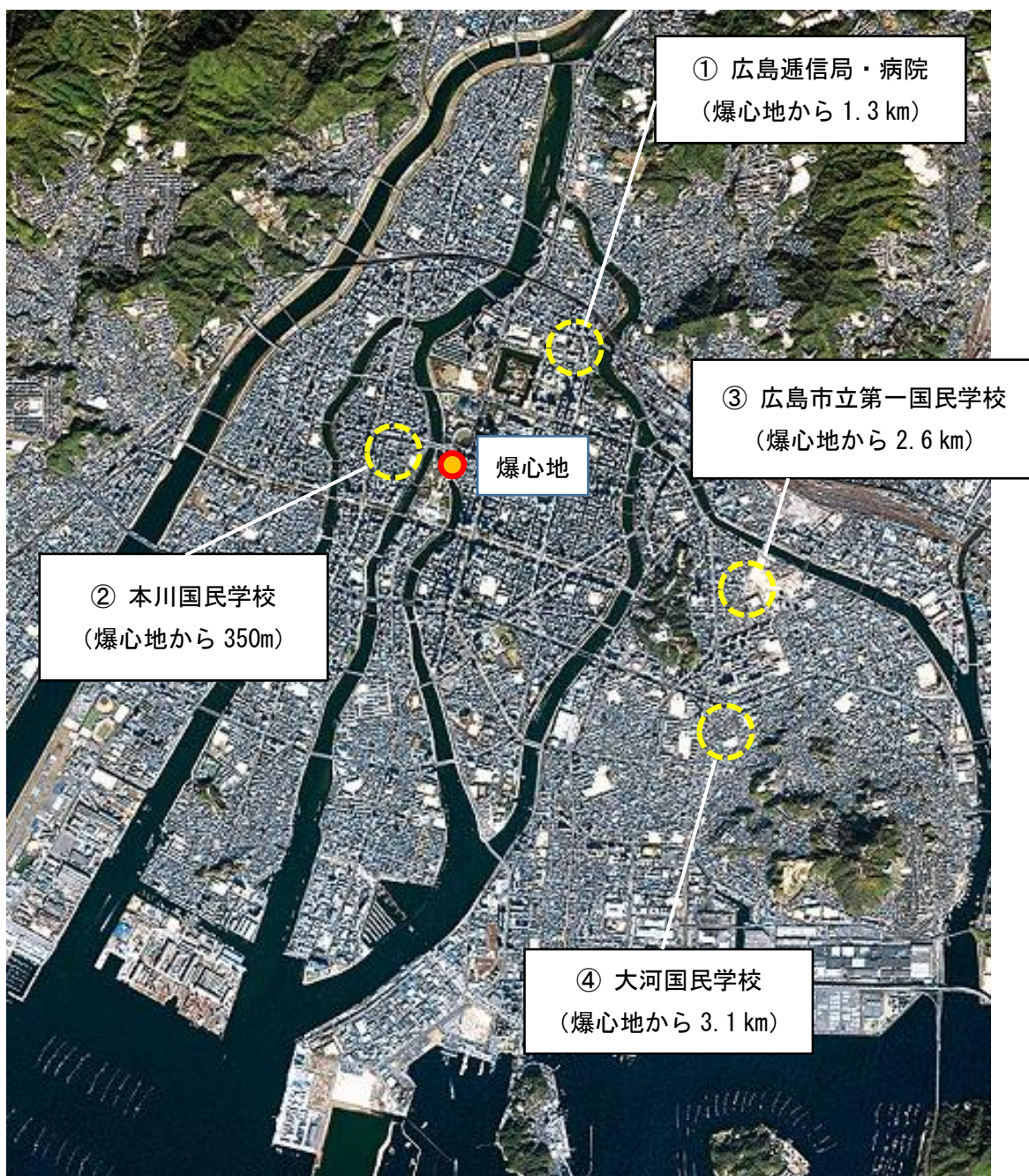
今度は長女が気になる。似の島に渡った。収容所を調べたが名簿には無い。あれでもと大きな声で呼び歩いたが結局駄目であった。しかしもう帰る船がない。仕方なく島で一泊した。十日宇品に着き、江波・吉島等の収容所・防空壕・飛行場と尋ね歩いた。死体はもう悪臭を放っている。それでも調べられるだけ調べた。各所で死体を火葬していた。江波では飯盒炊さんで野宿した。十一日は己斐収容所・学校と聞いては転々と歩いた。焼け残った田舎で歩いてなかなか行かれないのは横川や草津であった。己斐では蚊にさされながら馬車の上で一夜を明かした。死体も焼かれてほとんど片付き、市役所で名簿が整ったとのことで調べてもらったが、上田茂子の名は無かった。やむを得ず一応家に帰って茂子が帰っていないならばまた尋ねに出ることにした。己斐から広島駅まで歩いたが、何の目標もない。広い広い焼野原で、一木の杖が欲しくてもそれさえない。二人は心身ともにほんとに成れ果てた。「茂子は原に帰っておる」といった信彦の言葉を信じ、信彦の死体を抱きしめて我が家に帰った。家にはいるや「伯母さん茂子は」と尋ねた。伯母は「だれも帰っていないよ」という。この一言で張り詰めた精も魂も尽き果て、気が遠くなり土間に泣き伏したままであった。仏壇の前にいつ行ったか覚えがない。(中略)

本川橋ぞいの川縁は死体で埋めつくされ、川をのぞけば砂の中に手足を突っ込み流れもせず沈んでいる人、人、鷹野橋の川筋もやはり同じである。それから八丁目までの道路らしいところを、原から持参したスコップと鍬で、胸につけていたネームともんぺの柄をたよりにさがすことにした。翌日は近所の方々が二度目を探しに来て下さった。大変御世話をかけた。こんなにして二週間尋ね歩いたが何の手掛りもない。そこで思いを変えて山口県境大野村までの救護所をさがすことにした。救護所や警察を聞き尋ね、何度も無駄足をふみながら歩き廻ったが、どこにも名簿に乗っていない。宮内・大野、宮島にも無い。こんどは芸備線にはいることにした。戸坂・狩留家・深川にも無い。いよいよ三次にもいないことがわかり、あきらめがついた。同時に精魂が尽きたのか、可部警察で倒れた。親切なお巡りさんが近所のマッサージ師のところに連れ込み、治療させてくれた。やっと杖にすがって歩けるようになり、電車で横川に出た。広島駅まで杖を力に歩き、やっと汽車に乗った。今まで酔ったこともないのに中野駅の手前で眩暈がして車中に倒れた。中野駅に下ろして手当をもらった。中野駅から八本松駅に連絡して原から迎えに来るように計らってもらった。家に帰って両親に深く詫びた。頭が上がるようになって、広島市内を探しだしてから約半月を経ていた。家の者が「お前が倒れてはいけない、もうあきらめよ」というがどうにもならない。なぜあの時一緒に死ななかったかと愚痴も出る。(後略)

(3) 被爆者救護救援活動

8月15日の「終戦の詔勅」を受け、学徒勤労動員は解除。学校工場は閉鎖されて3年生は自宅待機に、4年生は失意のなか、広の東谷寄宿舍から自宅に帰って安堵したのも束の間、8月15日に広島県から被爆者救援活動の要請が入り、急遽、「賀茂高等女学校救護応援隊」の編成及び派遣となりました。

団長の桧山博教諭をはじめ11名の引率教諭とともに召集要請に応じた4年生及び3年生の生徒が最初に被爆地広島に入市したのは8月17日。その後、市内四カ所の臨時救護所へ分かれて移動し、各救護所での献身的な救援活動が行われました。活動は数度の交代を経て、約1か月近く続きました。救援活動に従事した四カ所の救護所は次のとおりです。



① 広島通信局及び通信病院

現在の広島通信病院の東側に位置する「旧外来棟被爆資料室」にて被爆の被害や救護所の様子を伺い知ることができます。



当時、生徒を引率し、この救護所で自らも炊事や看護に当たられた加藤宣子先生は次のような手記及び短歌を残されています。

私達の班は、白鳥町の通信局、隣接する通信病院で炊事することになった。炊事道具とてなく使えるものは大釜とバケツ、破れた水道ぐらいであった。あの懐かしい広島街が廃墟になっていた。漸く死体を片づけたばかりの状態、病院の隅には粉々のガラスが山積みされ血まみれの白衣が片寄せであるのを見た。建物といってもコンクリートの壁と床だけで何か敷物を敷いて沢山の被爆者が臥かされ、傷口深く蠢く蛆、まつわる蠅、苦しまれるその姿は悲惨そのものであった。医師の手当といってもピンセットで蛆を除いたあとに赤チンと油葉を塗布する程度で、その酷い有様を眼前に見ながらどうすることも出来ないのである。生徒達は汗まみれになりながら炊事し、手を真っ赤にしておむすびを握りつづけた。



「被爆者らに飯すすめいる乙女子よ 救援の日々を廃墟に炊ぎて」

「グラウンドに死者葬りつぐ夜々の炎 黙し見ていき看りのおとめら」

～ 「創立 80 周年記念誌」 から ～

② 本川国民学校

現在の広島市立本川小学校に設けられた救護所は爆心地から最も近い救護所であり、本川を挟んで原爆ドームを目の前に眺めることができます。当時の小学校としては珍しい鉄筋コンクリート造りの校舎でしたが、凄まじい爆風圧のため外壁だけを残して完全に消失しました。現在、旧校舎の一部や地下室は「本川小学校平和資料館」として一般公開されています。



当時、3年生の大庭みな子（椎名美奈子）は、この救護所で目の当たりにした被爆の実相を、随筆（精選女性随筆六 文藝春秋「地獄の配膳」一部抜粋）において次のように記しています。

わたしたちが唇の中に水を注いでやった老婆は糞尿にまみれたごぞの下から財布をひきずり出して私に寄越そうとした。私が首を振って立ち去ろうとすると、「あ、あんた、どうか、蠅を、蠅を追っておくれんさい」と赤むけの顔をひきつらせて喘いだ。

瞼のふちにも鼻の穴にも唇にも蠅を這わせた老婆がわずかに身をもがくと、蠅はのろのろと彼女の皮膚から飛びあがり、再びゆっくりとそのぬめった皮膚の上に舞いおりた。

「どうか、どうか、このごぞをひきずって、あの雨の降る中に出しておくれんさい。雨にあたれば少しは、少しは……金はみんなあげる。財布ごと」

まわりの患者たちは無表情に老婆を眺め、蠅の中で寝返りを打った。一時間後、この老婆は死んでいった。わたしにできることはただ雑炊を炊くことと、配ることだけであった。わたしたちが米をとぐのは水道の管が切れて流れっぱなしになっている瓦礫の間だったが、まわりには一面白骨が散らばっていた。指の骨、足の骨、肋骨などがあつた。骨の間に水が流れ、こぼれた米粒や馬鈴薯の皮が流れた。



十四歳の夏、わたしはものを言わなくなった。そしてこの夏の記憶はわたしの生涯を大きく変えた。歩き始めると、甦るこの記憶はわたしを立ち止まらせ、人間というものを考え直させる人骨の杭となった。

③ 広島市立第一国民学校

現在の広島市南区「段原山崎第二公園」(元 広島市立段原中学校)に位置した第一国民学校は国民学校を卒業した生徒が2年間学ぶ高等小学校でした。倒壊を免れた講堂と東校舎が臨時救護所となり、多くの患者が収容されました。その後、平屋建てだった東校舎は2階が増築され、2011(平成23)年まで広島市立段原中学校の技術室として使用されました。



次の文章は現地に派遣された水島愛子さん(当時3年生)の手記です。

寄宿生だった私は、早速、段原小学校に救急看護を命ぜられ、広島のを踏みました。家は崩れ、ほとんど灰と化していました。焼け残った段原小学校の講堂は、仮設病院となっていました。戸板にのせられた怪我人は、顔に紫色の斑点が出て死が近く、「水をくれ」「お母さん」と呼ぶ。人間が極限の境地で呼ぶ願いに、どう忘えてよいやらうろたえるだけでした。

運動場のいたる所で、校舎の板を剥いで数人の死体を重ねて焼いておられた。中には死体の一部が焼け残るなど、地獄絵巻そのものでした。講堂には引取り手のない女性の死体が腐乱し、蠅が黒だかりとなり、また、隣の人の火傷にも蠅がたかり、それを手で払ってあげることしかしてあげられなかった。外来の患者は、赤チンキを塗ってもらうだけといったお粗末な治療でした。



食事は、患者におにぎり一つ、看護人には二つ、それにお茶のみでした。私たちはそのおにぎりを作り、皆さんに配るのが仕事でした。一日中働きながら、おにぎりが喉を通らない日が続く、それでも患者さんの姿を見ると友達と頑張りました。

～ 『『姫さゆり』50年を経て』から～

④ 大河国民学校

現在の広島市立大河小学校に設けられた救護所は、比治山の南東部に位置し、爆心地からの距離もありました。そのため校舎の全壊は免れ、多くの被災者が収容されました。



次の文章は現地に派遣された愛原喜久子さん（当時4年生）の手記です。

私達は広より帰宅し、疲れを癒す間もなく、原爆被災者の方々に何とかしなくてはと駆り立てられる思いで、広島に救護隊として参加しました。全壊全焼の中で辛うじて残った大河小学校がそのまま収容所となりました。

そこで救護活動が始まりましたが、その時の痛ましい様子は、筆舌に尽くし難い惨状でした。何分にも物資はなく人手不足で正式な医師もなく、岡山医専の学生が手当てに当たりました。赤チンだけの治療で傷は化膿してウジがわき、異臭を放つ体は、教室の板の上に新聞を敷いて横たわっていました。髪は殆ど抜け落ち、その驚きと悲しみで慰める言葉もありませんでした。

火傷の重さに耐えられず、苦しみ、ついに力尽きて死んで行く人達、軽症のように見えた人が次々と亡くなられ、運動場で火葬されるのですが、お坊さんの先導もなく、お線香の一本すらなく、死を悲しんでくれる身内の一人としてお供えをしてくれることもなく、息の詰まる地獄の有様でした。また炎天下の中、食糧を毎日、大河から本庁まで、大八車を引いて配給を受け取るために、焼け果てた中を悲痛の思い出歩きました。



～ 『被爆』50周年を迎えて』から～

第2部 戦争・原爆体験とその後の人生

(1) 作家 大庭みな子と原爆

1968(昭和43)年デビュー作「三匹の蟹」で群像新人文学賞、第59回芥川賞を受賞する大庭みな子(旧姓 椎名美奈子)は、昭和19年4月から昭和21年3月まで賀茂高等女学校に在学。多感な青年期を過ごし、勤労働員及び原爆投下後の救援活動に参加しました。以下に略歴を示します。

- 1930(昭和05)年 0歳 東京の渋谷で生誕
- 1943(昭和18)年 13歳 愛知県豊橋市立高等女学校入学
- 1944(昭和19)年 14歳 広島県立賀茂高等女学校へ転学
- 1946(昭和21)年 16歳 山口県立岩国高等女学校へ転学(翌年4年制卒業)
- 1948(昭和23)年 18歳 新潟県立女子高等学校(新制3年生)へ編入
- 1949(昭和24)年 19歳 津田塾大学学芸学部英文学科入学
- 1959(昭和34)年 29歳 アメリカ合衆国(アラスカ州シトカ)へ移住
- 1974(昭和49)年 44歳 取材旅行で賀茂高等学校及び県内各地を訪問
- 1986(昭和61)年 56歳 賀茂高等学校創立80周年記念講演で東広島市を訪問
- 2007(平成19)年 76歳 逝去

随筆(精選女性随筆六 文藝春秋「その小径」一部抜粋)では次のように記しています。

その小径のことをなぜそんなによく覚えているのであろうか。

私は十四歳だった。終戦の日もその小径を喘ぎながら登った。喘ぐほどの急な坂の途中で、窪みのように中休みする場所があった。

山間の谷間に片側の山を削ってつくられたその坂径はそこで折れまがっていた。頭の上に張り出した枝が涼しい茂みをつくっていて、私はいつもそこでほっと一息入れた。(中略)

夏の宵、つるべの音の聞こえるその径を通ると、木立の間からうすい煙が立っていることがあった。野天風呂があるらしく、水を使う音が聞こえ、あるとき、木の繁みのわずかなすき間を、娘の白いからだがよぎった。馨しい森の精のひそかな沐浴を垣間見た嬉しい気分になり、私は娘の刺すようなきつい光の眼を甦えらせ、足早にそこを通り過ぎた。(中略)

その娘の強い光の眼と、白いからだと、水の音を、なぜ私はこんなにもいつまでも覚えているのだらう。その坂径の情景には、しつこい蝸の声がいつまでも唸れてまつわたり、わびしいこおろぎが鳴いたりする。蛍がぼっぼっと飛び交ったりもする。土手の曼殊沙華の血の色が明滅したりする。

終戦の日も私はその小径を喘ぎながら登り、わけもなく流れる涙を汗と一緒に拭った。

その夏の終わり、女学生だった私は広島原爆投下後の後始末に動員された。白骨と瓦礫の中で被爆者たちと十日余り過ごして、この里に再び帰って来たとき、この谷間に群れて飛ぶ蛍は無数の人魂に見え、曼殊沙華の血の色は悪魔の鬼のかざす松明に見えた。

海軍医であった父の勤務の関係で、小学校は呉市内の二河尋常小学校や江田島の海軍兵学校内に設置された従道尋常小学校で学びました。その後、愛知県の豊橋高等女学校から賀茂高等女学校へ転学した椎名美奈子は、父の転勤先が賀茂海軍病院（現在の国立病院機構賀茂精神医療センター）であったので、転学後しばらくは西条町森新村に居住していました。この随筆に登場する「小径」は自身の通学路だったのではないのでしょうか。14歳の女学生の純粋な人間性や揺れ動く心情は、終戦そして被爆後の凄惨な状況を体験したことによって根底から覆されてしまった様子が伺えます。勤労働員による早朝から夕方までの作業が始まると、自宅から賀茂高等女学校への通学は時間がかかり不便だったため、街中の神笠家（酒蔵通り「亀齢酒造」の向い）に下宿をして通学を継続しました。

大庭の書き下ろし長編小説である「浦島草」（昭和52年3月）は、母の実家である新潟県の蒲原、女学校時代を過ごした西条及び被爆地広島、結婚後に夫の転勤で暮らすアメリカ、さらに出生地であり大学生活及び帰国後の生活を過ごした東京を舞台としています。そして、人間の「欲望」をテーマに、特異な家族の人間関係やそれぞれの生き様を通して原爆の悲惨さやその不条理を表現しています。

【取材旅行の記事「野生時代」1975年4月号掲載】



【創立80周年記念講演のパフレット】

(2) 原爆後を生きる

被爆者の救援活動が終了した9月下旬から10月初旬にかけて学校の授業は再開しました。ただし教科書は従来のもを使用するものの、敗戦及び占領政策によって記述内容の多くは墨で抹消され、修身・日本史・地理等の授業は停止となりました。こうした混乱のなか、昭和21年3月、過酷な勤労働員や被爆者救援活動に参加した高女4年生は卒業を迎え、3年生は4年生へと進級しました。以下に学校制度の改革にとまなう、新制高校への移行について整理しておきます。

旧制中学・高等女学校等から新制高等学校への移行について

開始時（修了時）年齢	旧制中学・高等女学校等の学年	現在の学年
12歳（13歳）	1年	中学校 1年
13歳（14歳）	2年	中学校 2年
14歳（15歳）	3年	中学校 3年
15歳（16歳）	4年	高等学校1年
16歳（17歳）	5年	高等学校2年

賀茂高等女学校の新制高校への移行

	昭和21年度 (1946)	昭和22年度 (1947)	昭和23年度 (1948)	昭和24年度 (1949)	昭和25年度 (1950)	昭和26年度 (1951)
昭和17年 高女入学	3月 卒業（注1）					
昭和18年 高女入学	賀茂高女 4年	賀茂高女 5年（注2）	旧賀茂高校 3年（注3）			
昭和19年 高女入学	賀茂高女 3年	賀茂高女 4年	賀茂高女 5年（注4）	西条高校 3年（注5）		
昭和20年 高女入学	高等女学校 2年	併設中学校 3年（注6）	旧賀茂高校 1年	西条高校 2年	西条高校 3年	
昭和21年 高女入学	高等女学校 1年（注7）	併設中学校 2年	併設中学校 3年	西条高校 1年	西条高校 2年	西条高校 3年

（注1）昭和16年度入学生から修学年限4年が適用される

（注2）高等女学校の修業年限が5年にもどる（多くの生徒は4年の修業で卒業）

（注3）高等女学校の課程を修了後、新製の広島県賀茂高等学校へ1年間在学

（注4）第26回賀茂高等女学校卒業（昭和24年3月 高女最後の卒業生）

（注5）県立学校再編成（総合制・学区制・男女共学制）により昭和24年4月30日に設置

（注6）高等女学校1・2年生の修了者を新制併設中学校2・3年生として収容

（注7）高等女学校最後の入学生

昭和 18 年から昭和 21 年度の高等女学校入学生は、5 年制の復活そして高等女学校の廃止、新制中学校及び高校のスタート、さらに再編制（地域総合高校）へと目まぐるしい制度変更とともに学生生活を送ることとなりました。戦後の混乱が続く中、卒業生たちは、筆舌に尽くし難い過酷な体験や脳裏に刻まれた真実を「生きる力」にかえ、懸命に戦後を生き抜いて行きます。一方、教師という立場で女学生に寄り添い、苦しみや悲しみを共有した多くの先生方の存在もありました。そのお一人で、賀茂高等女学校の同窓生であり、昭和 20 年から昭和 49 年まで勤務された高崎（岡原）スマ子先生の手記（「思い出」から一部抜粋）を紹介します。

（前略）

私は彼女らと本川小学校へ向かった。かつて私も学生時代に 4 年間住んだ懐かしい城下町だったが、今見れば「国破れて山河あり」の感、一人で焼けた電車の残骸、おくろのように残った原爆ドームを見上げながら、人間は営みを作ったかと思うと、あっけなく崩してしまったりして、神を恐れぬ許せぬ業を平気で繰り返している。それに引き換え、広島の川々はどうかろう。あの日は、焼け焦げながら、逃げ飛び込んだ人々で溢れたというのに、もう過去に押し流して、むしろ静かに光って流れている。この時の女学生も現在 55, 56 歳になっているが、この時受けたショック、人間の空しさ、自然の悠久といったものが、何らかの人生観として生涯残されたと思う。

（中略）

戦後、17, 18 年経った頃、町の回覧板で原爆被爆者健康手帳の交付があることを知った。それによって定期的に健康診断をして頂けるということだ。ぼつぼつ市町村の厚生係の窓口をたたく人もあるようになり、私もその時の救援隊に出動したメンバーの要請によって、沢山の彼女らの証人となり、今も証明を続けている。

賀茂高女は引き続いて賀茂高校になって、私は昭和 49 年に退職するまで、いろいろな方法で当時の 3・4 年生に呼びかけて証明をし続けた。あの時の少女の中には、もう白血病で逝った人、ガンで逝った人もあり。引率教師の中にもある。55, 56 歳にもなれば、いろいろと思いがけない病気も出てくる。

めいめいが少女の日、垣間見た地獄絵図、あの原爆被爆者の実態に触れた哀しさを、人間がその惨事を戦争という名目で行ったということに、言い知れぬ憤りを抱いたことを、8 月 6 日を迎える度に思い出すのである。そして私たちは、戦争反対、平和を祈るのである。

原爆症の恐ろしさを私たちは知った。何の恐れもなくついて来て、人間愛に燃え、献身的に働いてくれた彼女たちに、その時の引率者の一人だった私に出来ることは、あの時の賀茂高等女学校救援隊員として入市し、救援に従事していながら、いまだに被爆者健康手帳の申請を、日々の生活に埋没して受けていない人たちのために、一人の証明者として待っていることである。

1985（昭和 60）年 8 月

高崎 スマ子 記

(3) 戦争・原爆体験を語る

① 西川（市地） 美恵子

東広島市西条下見にお住いの西川美恵子さんは昭和4年に寺西村でお生まれになりました。昭和17年4月に賀茂高等女学校へ入学。1年生や2年生の頃は農繁期を中心に出征兵士の家庭にて農業支援を行いました。授業は通常どおりに行われ、得意だった短距離走で競技大会にも出場されていたそうです。



3年生になると賀茂高等女学校は広島陸軍被服支廠の学校工場となり、勤労働員中心の学校生活となりました。楽しみにしていた修学旅行は中止となってしまいましたが、担任の小川先生そして数名の同級生とともに大分の別府温泉へ小旅行に行ったのが一番の思い出だそうです。

昭和20年3月、4年生が卒業した後、親元を離れて呉市広での寄宿舎生活そして第十一海軍航空廠での三交代の旋盤加工作業に従事することとなりました。広東谷の宿舎には鳥取県の女学校や福山鞆の女学校といった遠方からも女学生が集まっていたそうです。作業には海軍兵士が指導に当たっておられたそうで、立ちっぱなしの作業にもかかわらず、その凛々しい姿に恋心でワクワクもしたそうです。また、実家が農家であったため、時々面会に訪れる母が食料を持参してくれたことがたいへんありがたかったそうです。原爆投下前日の8月5日は夜12時まで勤務し、翌日の深夜に帰宿。6日の投下時は宿舎で迎え、建物の振動や窓越しに閃光を感じたそうです。また広島方面に立ち上るきのこ雲も確認できたそうです。

終戦を迎え勤労働員が解かれた8月16日、呉線三原経由で西条の自宅へ帰宅したのも束の間、原爆被害者救援活動への参加要請の連絡が入り、翌日17日から現在の広島市南区にあった大河国民学校にて外来患者の治療補助などに当たられました。以下の手記は西川さんが「被爆」(50周年を迎えて)に寄稿された手記の抜粋です。

夕方になると、私たちは、死体安置所である裁縫教室から、腐敗のひどいものや確認の済んだ亡骸を運びました。戸板の上にも一枚掛けただけの葬式の後、運動場の端にたくさん掘られた穴に次々と運び、茶毘に付しました。窓からは、一晩中とろとろと青い火が見え、室内では患者さんの苦しそうな呻き声、親子の死別の嗚咽と、真っ暗な夜の出来事が手に取るように聞こえ、地獄の釜の上にいる思いでした。そのうち東の空が白み、ご来迎とはこのことかと思って元気を出して奉仕に励みました。

寝泊りは倒壊を免れた校舎の2階を使用できたものの、無残な姿で横たわる患者や遺体の搬出そして茶毘に付す作業の連続は、15歳の女学生にとってあまりにも過酷な時間であったことと思われます。「不思議な感覚でしたが、ただ淡々と作業するしかなかったです」と当時を振り返ってお話いただきました。また、原爆や戦争の悲惨さについて継承活動をしてきている高校生たちに感謝の気持ちを述べていただきました。

③ 清老（海木）綾子

東広島市志和町にお住まいの清老綾子さん（当時91歳）からお送りいただいた手記を紹介します。

孫娘（中国放送の報道バラエティー番組などで活躍中の清老寛子さん）から手渡された新聞記事「市民グループが市内在住者の体験談募る」を読み、七十数年前の記憶をたどりながらペンならぬ鉛筆を取られたとのことでした。



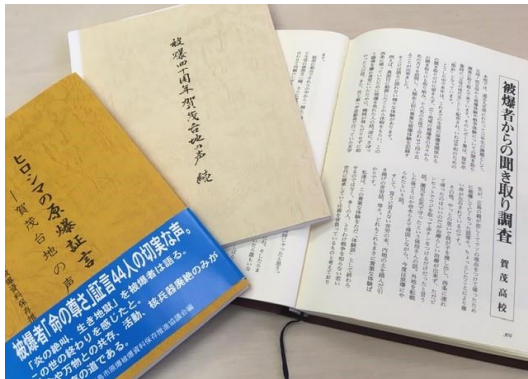
当時、賀茂高等女学校の二年生だった私は「ガタゴト」道を自転車で八本松にと走っていた。「フト」気がつくと東の空から西に向けて一本の飛行機雲、その先端に「ピカ」「ピカ」と光を放つ飛行機（原爆を投下した飛行機）。別に気に掛けるでもなく駅に到着。しかし、当時は汽車の遅れは珍しくなく、待てども列車は来ず。と其の時「ピカ」と目を射る様な光に続いて「ドン」と大きな音。誰かが西の空に「モクモク」と舞い上がる火の玉の雲に気付き「さあ大変と」駅前の山に走った。「あれが原子爆弾」と当時誰知る由もなく、遅れ遅れの汽車にて女学校に向かう。女学校と言っても当時は各家庭より持ち寄せられたミシンが教室に並べられ、流作業で一枚でも多く縫い上げようと軍服を縫っていた。

八月六日原爆投下。昼過ぎより、西条駅にドンドン焼けどの患者さんが各病院や国療等へ担架に乗せられ運び込まれる。西農の生徒達も手伝って居たと思う。そして終戦後、被爆者救護の動員命令がくだり、第一回の救護班に参加。母の帯を解き大きなリュックをつくり（当時買える物は何も無い時代）、着替の衣類や毛布、梅干し、炒りごま、胡麻塩等々をリュックに一杯詰め込み、十七日に原爆投下の地広島に入る。目の前に見る広島の街は想像を絶する悲惨な状況。被爆者の収容所に当てられた小学校には、各教室や講堂には立錐の余地もない程に血農のついた毛布や布団にくるまった被爆者が収容されて居た。鼻をつく様な異様な臭い。背中一面真赤に焼けただれたおじさん。傷はないけど頭の髪がどんどん抜けていく男の子。「お母ちゃん・お母ちゃん」と母を呼び続ける二歳の坊や。腕の傷口が膿んで肉がこぼれ落ちそうになっている男の子。昼食のおすびを持って行ってみると死んで冷たくなっている人。伝染病患者の別棟など、思い出せばきりが無い。いずれも二度と見たくない、出会いたくない現実ばかり。私達は第一回最初の救護班だったので色々することも多く、ご飯を炊く「カマド」を作ったり、廃材を拾い集めて薪木を作ったり、誰かさんが何処からかお米を運んできた。どこかに軍の保管場所があったのだろうか、

当時十四歳の少女、良く頑張った、褒めてやりたい。一週間泊まり込みでの救助活動。夜は段原小学校での寝泊まり、雨が降れば壊れた屋根より雨漏り、毛布を持って移動でも当時二年生の女学生誰一人不満も漏らさず良く良く頑張った。其の後二、三回と救助活動は続いた。しかし私達には待っていている家族があり、住む家のある事への感謝をしながら原爆に会って家を失い家族を失い乍も一生懸命生きている人の事を考えると、我が身の幸せに感謝感謝の手を合わさずにはいられない思いだった。

第3部 継承・そして未来へ

賀茂高等学校では1977（昭和52）年頃から3年生への課題として、父母・祖父母に被爆や戦争体験を聴き取る取組が数年間継続され、「父母の現代史」の名で編集及び配付が行われました。また、被爆40周年にあたる1985（昭和60）年には賀茂高等学校教諭の斎尾和望先生を中心に、在校生による「被爆者からの聞き取り調査」も行われました。その証言レポートの一部は「被爆四十周年賀茂台地の声」（1986年発刊）にまとめられ、その後、貴重な証言の録音音声はデジタルデータとして編集保存されています。



戦後復興から高度経済成長、そして安定成長からバブル経済の崩壊へと、戦後50年を経て社会構造や社会認識も大きく変化しました。そして1995（平成7）年、戦争や被爆の悲惨さについて身を持って体験した卒業生も60歳代半ばを迎えていました。また、半世紀という節目にあたり、歴史認識の再評価、戦争及び被爆の実相をどう継承していくのかが問われたこの年、賀茂高等女学校昭和21年卒業生の手記集「被爆」が編集発行されました。また1998（平成10）年には昭和22年卒業生の手記集「姫さゆり」が編集発行されました。



2017（平成29）年からは「ひがしひろしま音楽祭」や東広島市原爆死没者慰霊式後の「ピースイベント」にて、大庭みな子の随筆「地獄の配膳」及び原爆詩や手記の朗読を取り入れた楽曲の演奏が継続されており、2018（平成30）年からは賀茂高等学校演劇部生徒が朗読で参加しています。また、2022（令和4）年から「東広島市平和学習バス」のガイド役を生徒が担っています。

